



会話分析から見た倒置文

- 会話分析におけるrepairとしての機能を持つ。
- その裏には、話し手は話題に登場する人物・物についてどの程度注目しているかについてのモデルを作り、その度合いによって明示すべきかどうかを判断する。
時折、何らかの理由でその度合いの押し量りが間違えた場合に倒置構文が現れる。



倒置文にならない例文

高見(1995)より

- *あと1年で**定年**なんですか、**誰が**。
「誰が」は補足的に追加されえない。疑問文において必須の要素である。
- ***ワイン**は飲めない、**ドイツの**。
前半部分はワイン全般について「飲めない」としていることになるので、矛盾する「特定の国のものは」という補足で訂正できるものではない。
- **ワイン**が好きなんだ、特に**ドイツの**(が)。



倒置文にならない例文

- ??僕は飲みたい、水が。

高見は、「水が」は焦点であるので、後置できないという。

酒が飲めない人が冗談としてわざと今日は「酒を飲みたい」と誤解させておいて、「いや酒でなくて水を飲みたい」というふうに訂正するという状況では適正文である。



高見の制約

- 日本語の後置文に課される機能的制約
→ 日本語の後置文は、後置要素に焦点以外の要素が現れる場合にのみ適格となる。
- 高見の焦点とはもっとも求められている情報をさしていると考えられる。
したがって、最も求められている情報は補足的に提示されることはないという制約と解釈できる。